

Thematic Exhibition
Bamboo
The Essence of Japanese Aesthetics

企画展

日本の美

竹

1月5日(火) - 1月31日(日)

 徳川美術館
THE TOKUGAWA ART MUSEUM



展覧会概要

四季を通じて青緑を保ち、真っ直ぐに育つ竹は、清らかさや繁栄の象徴と考えられてきました。特に中国では、寒中でも緑を保つ松や、花を咲かせる梅とともに、高潔さの象徴である「歳寒三友」のひとつとして愛されました。日本では桝などとともに神事で用いられる一方で、『竹取物語』をはじめとする文学作品にも登場します。高い強度と柔軟性をあわせもち、環境によって色・姿を変える竹は、古くから現代にいたるまで、生活のなかの様々な工芸品に用いられ、しばしば絵画や工芸品のモチーフにもなっています。日本人にとって最も身近な植物のひとつと言えるでしょう。

本展では、竹にまつわるさまざまな作品から、竹とともに育まれた日本の美意識を探ります。

展覧会基本情報

- ◆展覧会名 企画展 竹 - 日本の美 -
- ◆会場 名古屋市蓬左文庫展示室
- ◆会期 2021年1月5日(火) ~ 1月31日(日)
- ◆開館時間 午前10時~午後5時 (入館は午後4時30分まで)
- ◆休館日 月曜日(但し、1月11日(月・祝)は開館、翌12日(火)は休館)
年未年始: 2020年12月14日(月) ~ 2021年1月4日(月)
- ◆観覧料 一般1,200円 高・大生700円 小・中生500円
※20名様以上の団体は一般1,000円 高大生600円 小中生400円 ※毎週土曜日は高校生以下無料
- ◆出展作品数 83件 うち国宝1件 重要文化財1件 重要美術品1件
- ◆主催 徳川美術館 名古屋市蓬左文庫 毎日新聞社
- ◆後援 一般財団法人 毎日書道会
- ◆協力 名古屋市交通局

取材について

展覧会開催期間中、随時ご対応させていただきます。

展覧会取材の他、特定の展覧作品の取材も可能でございます。
動画撮影につきましては開館時間外も対応いたしますので、ぜひお気軽にご相談ください。

第一章 松竹梅

— 歳寒三友と蓬萊 —

お正月をはじめとする慶事や吉祥を彩る、縁起物として知られる「松竹梅」の組み合わせは、もとは中国に由来します。中国では、寒中でも緑を保つ松・竹や、寒中に花を咲かせる梅が、高潔さの象徴である「歳寒三友」として好まれました。

日本での松竹梅は、歳寒三友のイメージが薄らぐ一方で、おめでたい題材として受け容れられ、「鶴は千年、亀は万年」と称される鶴・亀と組み合わせられるようになりました。そして、不老不死の仙人が住むと伝えられた蓬萊を想起させる組み合わせに発展しました。



竹に鶴図 二幅対のうち左幅 狩野常信筆

右幅には松を背景に天に向かって啼く鶴が描かれる。松と竹に、千年の長寿を保つとされた鶴のつがいと組み合わせ、大変めでたい図である。



国宝 松竹鶴亀文柄付白銅鏡 (附 初音時絵乱箱)

銘 天下一中嶋伊勢守

寛永16年(1639)9月22日、3代将軍家光の娘千代姫が、尾張徳川家2代光友に婚嫁する際に持参した嫁入り道具「初音調度」の内、乱箱に附属する鏡である。岩から生えて左右に湾曲する老松と竹を中心に、二羽の鶴と亀が配された図柄で、蓬萊の地を想起させる。

第二章 清雅なる竹

竹は、真っ直ぐに伸び、四季を通して青緑を保ち、風に揺れる葉が心地よい音を奏で、逞しい生命力で生育します。このため、清らかさや繁栄の象徴と考えられてきました。

日本ではかぐや姫の物語として知られる『竹取物語』をはじめとする物語や神話に重要なモチーフとして竹が登場し、天皇の日常の居所である清涼殿にも植えられました。

一方、中国では、風雪に屈しない竹は理想的な精神の象徴として考えられ、「竹林の七賢」に代表される、俗塵を嫌う文人たちによって、特に愛好されました。



張州雜志 卷五十三 内藤東甫著

尾張・熱田の門松は、左右の松に各二本の竹を添え、上には各一本の竹を交互に向けて横に渡し、注連縄・裏白・橙などを飾り付け、さらに斜め十文字に竹を渡すという大がかりな門松であった。竹が多く用いられているのが特徴的。『張州雜志』とは、尾張徳川家九代宗睦の内命を受けて内藤東甫が編纂した尾張の地誌である。

第三章 竹をえがく、竹をかたどる

文人たちに愛された竹は、中国・南宋時代には水墨画の画題として確立しました。以後、竹を描いた絵画は、水墨画や彩色画を問わず、日本でも盛んに描かれました。また、絵画のみならず、工芸品のモチーフにも竹は多用されました。絵画や工芸品の題材として竹がしきりに登場することは、竹が人々の生活にきわめて身近な植物であったことを教えてくれます。



墨竹図 二幅対の内 右幅

風になびき揺れる竹が、太湖石と呼ばれる岩とともに描かれており、葉擦れの澄んだ音が聞こえてくるよう。凛とした空間からは、筆者の高潔な佇まいも想起される。

竹図衝立 渡辺清筆

尾張の復古やまと絵師の渡辺清(1778~1861)によって描かれた、女竹の衝立である。女竹は現代の植物学では笹に分類されるが、江戸時代以前の日本では、背丈が低く群生する種類を笹、本作に描かれるような丈の高い種類を竹として呼び分けていた。



竹取物語図 田中訥言筆

「かぐや姫」の物語として有名な『竹取物語』は、竹の物語とも言える。かぐや姫は、竹の工芸を生業としていた翁によって、輝く竹の中に見つけられた。翁と媼は節ごとに黄金の入った竹を得て裕福になり、二人に育てられたかぐや姫は、竹のようにすくすくと短期間で成長する。



志野竹の子文筒茶碗 歌銘 玉川 大脇家寄贈

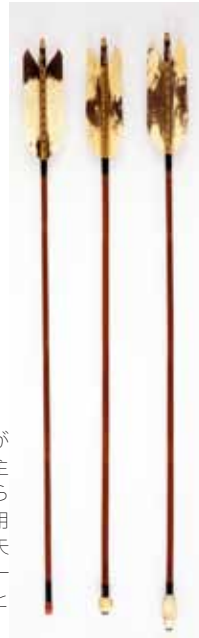
志野焼独特の柔らかい釉の中に、筍が幻想的に浮かび上がった茶碗である。

現代の食卓に並ぶ筍は一般的に孟宗竹であるが、孟宗竹は江戸時代中期に日本に渡ってきたと言われるため、本品に描かれた筍は、淡竹か真竹の筍と考えられる。



第四章 竹をもちいる

竹はしなやかで折れにくく、繊維で分かちやすく、また熱を加えると曲げやすくなるという加工しやすい特性から、日本人の生活の中で幅広く活用されてきました。筒や籠などの容器から、筆などの文房具、笙などの楽器に至るまで、竹で作られた器物は枚挙に暇がありません。室町時代以降、茶の湯が隆盛をみせる中で、竹は茶杓や花生をはじめとした茶の湯の道具の中に用いられ、立ち枯れて表面に変化が生じた寂竹や囲炉裏の煙で燻されてきた煤竹など、その侘びた風情も愛されてきました。



墨竹図風炉先屏風 二曲一隻 狩野常信筆

水辺に群生する淡竹、太湖石が描かれている。実際にしばしば茶席で、水指や風炉釜の後ろに立てて用いられたようで、飛沫を受けた跡が見られる。窓は鉄刀木で枠を設け、黒褐色の裨が特徴である黒竹を差し込んだ、凝った意匠となっている。



竹茶杓 虫喰
伝千利休作

筒には、稽蓋との境に利休の法号「宗易」と花押が黒漆で記される。茶杓の中節の下方と切止に空いた穴の見立てから、後世「虫喰」と呼ばれた。茶の湯の文化では、このような傷みや変形のある竹に、魅力が見出されてきた。

征矢

矢の軸（矢柄）は古くは葦の幹が用いられ、鎌倉時代以降は竹が主流となった。本品は、矢竹で作られた矢で、矢竹の名も矢の軸に用いられることに由来している。矢竹は稈が真っ直ぐかつ強靱で、一節から枝が一本しか伸びないこともあり、矢に適している。

展覧会関連イベント

◆担当学芸員の見どころガイド

日 時： 1月17日（日）午後1時～（30分程度） 会 場： 徳川美術館 講堂
定 員： 先着60名 ※入館者参加自由

◆土曜講座「江戸時代に制作された古絵巻模本について」

講 師： 龍澤 彩（当館非常勤学芸員・金城学院大学教授）
日 時： 1月23日（土）午後1時30分～3時 会 場： 徳川美術館 講堂
定 員： 60名 受講費：空席がある場合受講可、当日料金600円

◆関連展示「東海毎日新春選抜書展」

会 期： 1月5日（火）～31日（日）
会 場： 徳川美術館 西ロビーおよび本館前スペース ※入館者見学自由

◆新春揮毫

揮 毫： 川崎 尚麗氏（毎日書道展審査会員） 会 場： 徳川美術館 玄関ロビー
日 時： 1月5日（火）午後2時～ 定 員： 40名 ※入館者見学自由

視聴者・読者プレゼント提供

企画展「竹ー日本の美ー」を、ぜひ御社媒体にてご紹介ください。画像を1点以上使用してご紹介いただいた場合、視聴者・読者プレゼントとして本展覧会の御招待チケット（非売品）を、1媒体5組10名様にご提供いたします。



お問い合わせ 取材は随時お受けいたします



〒461-0023 名古屋市中区徳川町1017
TEL：052-935-6262（10時～17時受付）
052-935-8222（営業時間外受付）
FAX：052-935-6261

[報道関係対応窓口] 徳川美術館 管理部
吉川 由紀 yuki@tokugawa.or.jp
竹内 大知 d.takeuchi@tokugawa.or.jp



企画展 竹—日本の美—

広報画像申請書 使用期間：～2021年1月31日



No.1
墨竹図風炉先屏風 狩野常信筆
江戸時代 17-18世紀
徳川美術館蔵



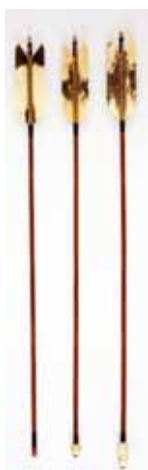
No.2
志野竹の子文筒茶碗 歌銘 玉川
桃山時代 16-17世紀
岡谷家寄贈 徳川美術館蔵



No.3
竹取物語図 田中訥言筆
江戸時代 19世紀
個人蔵



No.4
竹茶杓 虫喰 伝千利休作
桃山時代 16世紀
徳川美術館蔵



No.5
征矢
徳川宗睦 (尾張家9代) 所用
江戸時代 18世紀
徳川美術館蔵



No.6
竹に鶴図 二幅対のうち左幅
狩野常信筆
江戸時代 18世紀
徳川美術館蔵

使用媒体

放送日・発売日

プレゼント提供 希望する 希望しない

貴社名

ご担当者様

データ送付先アドレス

ご連絡先電話番号

【ご利用にあたっての注意事項】

- ・画像のご利用は本展覧会の紹介用途のみに限ります。
- ・部分アップのトリミングは可能ですが、色変更等の加工はご遠慮ください。
- ・二次利用不可です。
- ・画像には最低限「タイトル」と「所蔵」のクレジットを明記してください。
- ・内容確認のための校正原稿をお送りください。
- ・ご掲載誌、DVD等を1部「徳川美術館 管理部 広報宛」でお送りください。



〒461-0023 名古屋市東区徳川町 1017

TEL: 052-935-6262 (10時～17時受付)

052-935-8222 (営業時間外受付)

FAX: 052-935-6261

担当: 吉川 yuki@tokugawa.or.jp

竹内 d.takeuchi@tokugawa.or.jp